資料４

令和４年度 首里城扁額製作検討委員会

第１回 委員会資料

10月3日（月）14:00 - 17:00

【資料４】扁額試作（案）

4-1. 試作についての考え方
4-2. 試作についての検討事項
4-3. 原寸試作（案）
4-4. 手板（案）

4-1. 試作についての考え方

資料４

（１）試作の目的（Ｒ３年度検討より）

●必要な品質や製作体制の確保　●各工程の確認　●分野間連携の確認　　等

（２）試作のスケジュール（Ｒ３年度検討より）

	Ｒ４年度	Ｒ５年度
木工・彫刻	額縁彫刻、文字彫刻 ●―12月中旬～―● 接手・仕口の確認 ●―10月下旬～―●	
髹漆・加飾	手板製作 ●―10月中旬～―● （黄色塗、青塗、朱塗、墨ふくり帰し塗、金薄磨）	●―4月上旬～10月下旬―● 地板、額縁躯体、額縁・文字彫刻 （塗り、金薄磨等）

※スケジュール詳細は資料１P5に記載

（３）試作での製作物（Ｒ３年度検討より）

	規模	木材	試作内容	製作後の使途
1	面積1/2程度（長辺1/2程度、短辺原寸）	全てヒノキ材	令和４年度の木工・彫刻から、令和５年度の髹漆・加飾まで、本作の工程に倣って一通り実施。	「見せる復興」の一環として、一般向けに公開・展示予定。
2	原寸	イヌマキ材	額縁躯体材の木取り、乾燥を行いながら、含水率の変化や材の動きを確認。（仕口加工や仮組みするかは要検討）	品質に問題がなければ、Ｒ５年度以降の本作に使用。

※本日の検討事項は次ページ

4-2. 試作についての検討事項

資料４

仕様に関する未確定項目のうち、試作を進めるために整理が必要な内容を、以下に示す。

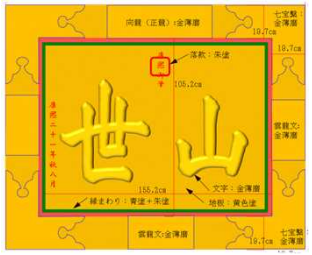
	未確定項目	分野	検討方法	整理が必要な内容	確認時期
1	原寸試作	文字・落款 木工・彫刻 髹漆・加飾	扁額の完成イメージとするか製作工程とするか検討	試作の方向性	第１回ワーキング （9月中旬に実施）
2	文様図	木工・彫刻	事例等を参考に、東京藝大で文様図案を複数作成し検討	文様図作成の方向性 （関連：資料３　p13～17）	第２回ワーキング （12月頃を予定）
3	文字の厚み、断面形状	木工・彫刻	事例等を参考に、造形等部分試作を行い、厚みや断面形状を検討	作成する文字の厚み、断面形状等 （関連：資料３　p13～17）	第２回ワーキング （12月頃を予定）
4	落款印、銘の製作方法	文字・落款 木工・彫刻 髹漆・加飾	事例等を参考に、部分試作を行い、製作方法を検討	試作の方法 彫刻と髹漆・加飾の工程手順 （関連：資料３　p13～17）	第２回ワーキング （12月頃を予定）
5	色味の表現	髹漆・加飾	今年度ワーキングにて、手板試作により検討	黄色塗、朱塗、青塗、黒塗、墨ふくり帰し塗、金薄磨の考え方	第２回ワーキングで中間確認（12月頃） 第３回ワーキングで最終確認（２月頃）

4-3. 原寸試作（案）

資料４

（１）Ｒ３案とＲ４案の比較

採用（案）

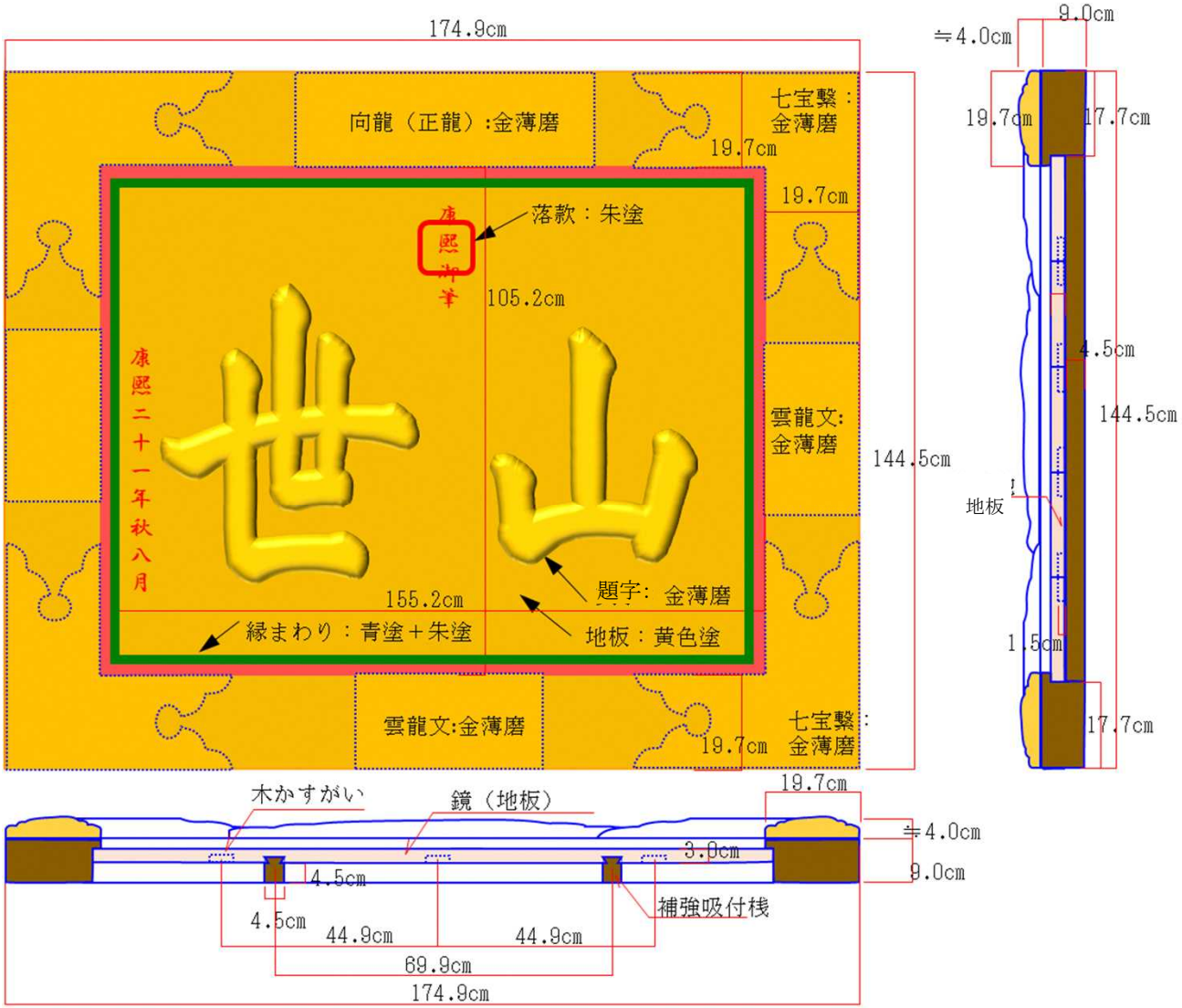
	Ｒ３案	Ｒ４案
イメージ		
寸法	短辺方向：原寸 長辺方向：原寸の1/2	短辺方向：原寸 長辺方向：原寸の1/2＋向龍寸法
額縁	四辺に額縁を廻す	一辺は額縁を廻さず裏側から桟等で止め、断面構造がわかるようにする
額縁彫刻	四辺すべてを彫刻、髹漆・加飾の全工程を実施	製作工程がわかるように辺ごとに作り分ける （例）上辺：彫刻、髹漆・加飾の全工程を実施 短辺：彫刻まで実施、髹漆・加飾は未実施 下辺：木取りまで実施、彫刻以降は未実施
題字彫刻	「中山世土」４字のうち、特徴的な２字で作成（候補：「山」「世」）	「中山世土」４字のうち、特徴的な左側２字で作成（候補：「世」「土」で「土・山」は同程度）
落款印・銘	彫刻、髹漆・加飾の全工程を実施	[R3案を踏襲]（題字との離隔等も確認可能）
地板の髹漆・加飾	彫刻、髹漆・加飾の全工程を実施	彫刻、髹漆・加飾の全工程を実施 ※別途で髹漆の主工程が分かる手板を作成
メリット	扁額の完成イメージが明確 完成した扁額の取扱い方法の検討が可能	製作工程が分かりやすい 試作に係る作業分量が必要最低限で確認可能
デメリット	全体を完成させ各製作工程がわからない	完成イメージが若干不明[全体バランスは確認可能] 設置等の検討に工夫が必要

4-3. 原寸試作（案）

資料４

※令和３年度案

令和３年度には、地板や額縁の装飾が変更するなどがあるため、文字・落款、木工・彫刻、髹漆・加飾の各工程に必要な詳細仕様の確認とともに、全体のバランスや作業工程の流れを確認するため、原寸での試作案を確認した。

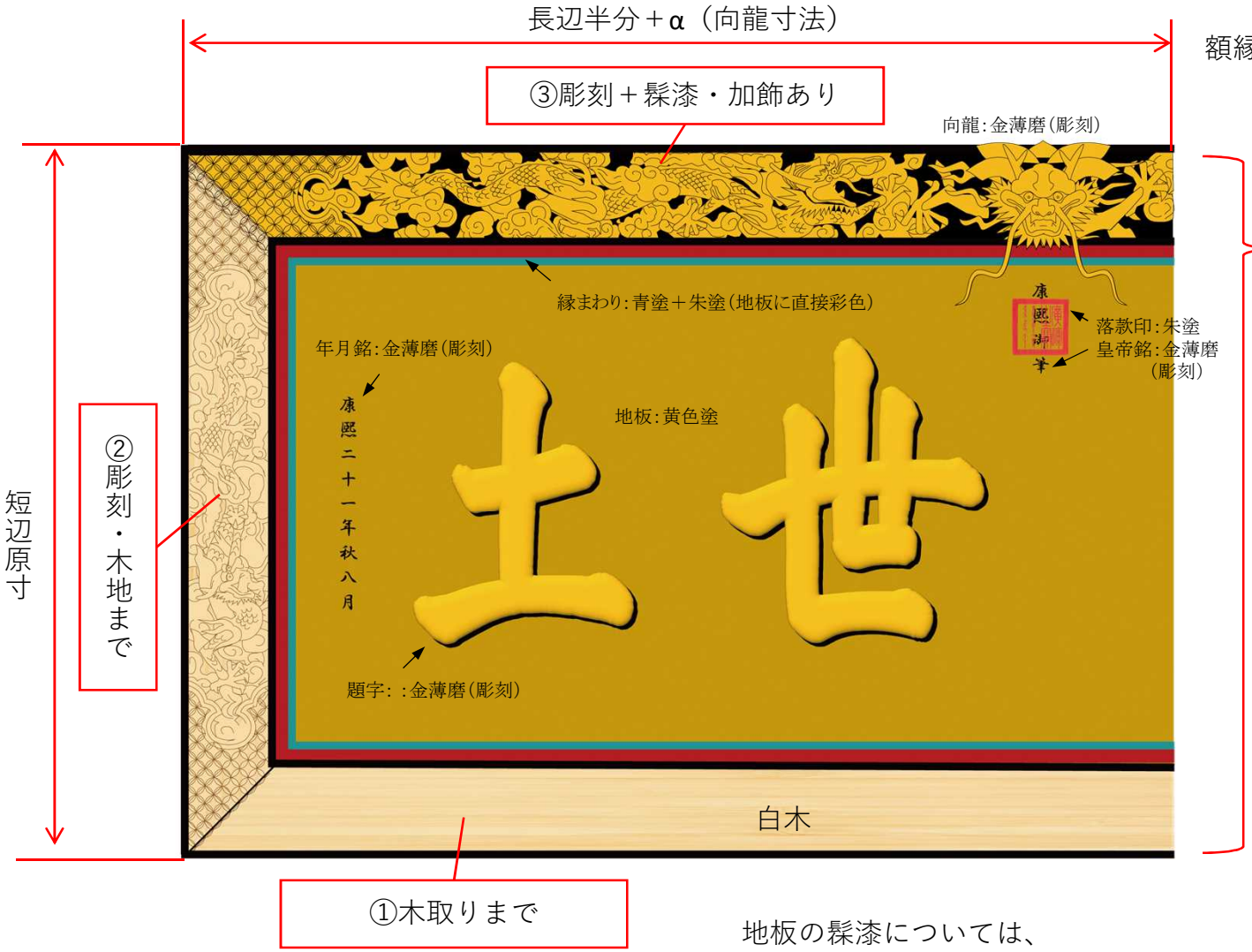


4-3. 原寸試作（案）

資料４

※令和４年度案

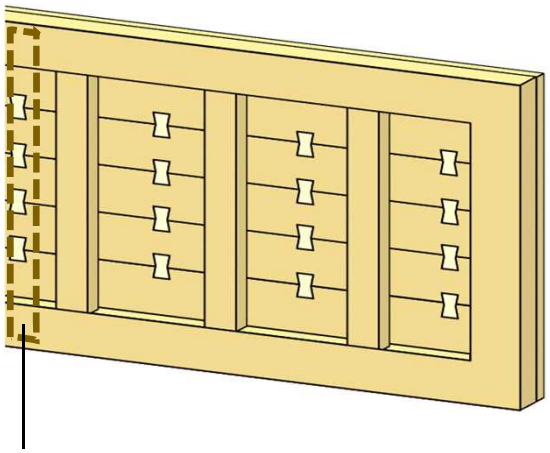
令和３年度の考え方に加え、技術継承・人材育成を見据え、各主要工程や木地構造等がわかるような案を確認した。



額縁は①～③の工程を３辺で段階的に見せる。

一辺は額縁を廻さず裏側から別材で補強して、断面構造がわかるようにする

裏面イメージ図



※安全性を考慮し、桟・かすがいで懸念があれば、裏側から別材で補強することも可能。

地板の髹漆については、別途で髹漆工程の手板を作成する。

4-3. 原寸試作（案）

資料４

（１）文様図の試作

事例等を参考に、東京藝大で文様図案を複数作成し検討する。

種別	参考事例（案）	試作（案）
向龍文	■立体事例 ・琉球王国事例 ・龍頭観音像（沖縄県立博物館・美術館） ・首里城正殿唐破風龍頭棟飾 ・伊江殿内庭園の龍樋（那覇市文化財課） ・海外扁額事例（台湾・中国） ■絵図事例 ・皮弁服の龍下図（鎌倉芳太郎資料）	・参考事例から厳選し統合して２案程度を作成
長辺左右・短辺左右の龍文および雲文・火炎宝珠	■立体事例 ・琉球王国事例 ・首里城正殿額木龍（浮彫） ・海外扁額事例（台湾・中国） ■絵図資料 ・皮弁服の龍下図（鎌倉芳太郎資料） ・前回製作時の扁額龍下図	・参考事例から厳選し統合して２案程度を作成

（２）文字の厚み・断面形状の試作

事例等を参考に、造形等部分試作を行い、厚みや断面形状を検討する。

	琉球事例	大型扁額（台湾）事例	試作（案）
厚み	・「致和」は、題字の厚みは約0.6cm。 ・「荘厳国土」は、地板の彫り下げ約0.5cm。	・事例８件の題字の厚みは1.5～2.3cm。	２種類 （1.0cm、1.5cm）
断面形状	・「致和」は、蒲鉾型。 ・「荘厳国土」は、肉合い彫り。	・事例８件の断面形状は薄板型が６件、蒲鉾型が２件。	２種類 （蒲鉾型、薄板型）

（３）落款印、銘の製作方法の試作

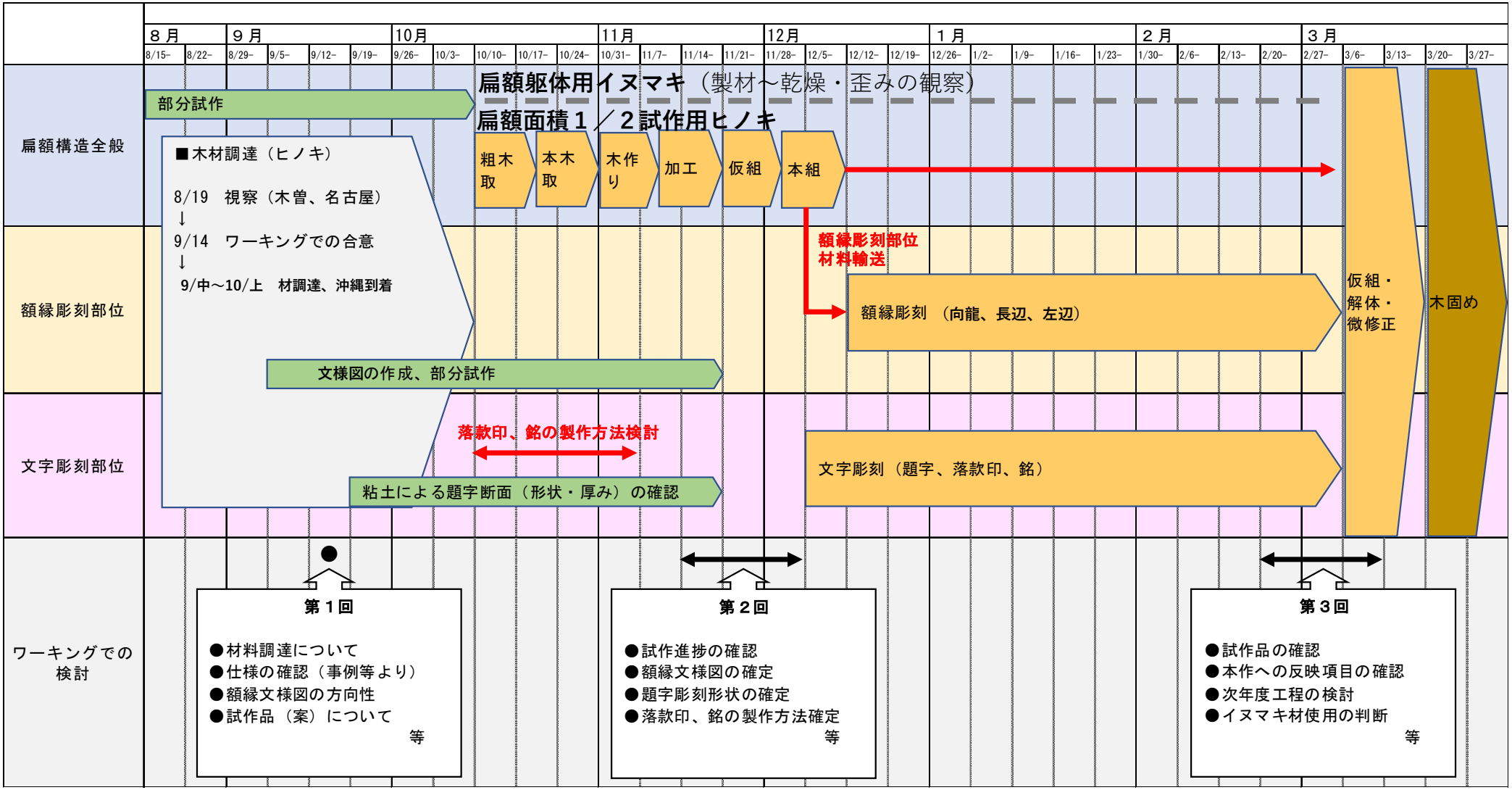
事例等を参考に、部分試作を行い、製作方法を検討する。

	琉球事例	大型扁額（台湾）事例	試作（案）
落款印	・「致和」は、輪郭まわりを彫り込み表面に髹漆、厚0.2cm内外（題字は貼り付けによる）。 ・「荘厳国土」は、印影まわり・余白の彫り込みと印影自体の線彫りの２種、深さ0.2cm内外。	・事例８件とも浮彫（象嵌）、厚0.28～1.6cm。	１種類 （貼り付け、題字と同じ手法）
銘	・「致和」は、輪郭まわりを彫り込み、表面に髹漆、厚0.2cm内外（題字は貼り付けによる）。 ・「荘厳国土」は、肉合い彫り、深さ0.2cm内外。	・事例８件とも浮彫（象嵌）、厚は落款印と同等。	１種類 （貼り付け、題字と同じ手法）

4-3. 原寸試作（案）

資料４

■原寸試作のスケジュール（案）



※R5年度より髹漆・加飾工程実施

4-3. 原寸試作（案）

資料４

（１）原寸試作における髹漆・加飾作業工程の確認事項

項目	部位	内容	根拠
髹漆・加飾	地板	布着せは、表（おもて）面は全面に行う。 本組後に、裏面に墨ふくり帰塗りを行う。	尚家文書360記載の作業工程をもとにWG部会で確認
		地板面に彫刻を施す部分は、布断ちを行う。	前回製作時を参考にWG部会で確認
	額縁躯体	布着せは、一辺毎に行う。 本組後に、裏面に墨ふくり帰塗りを行う。	尚家文書360記載の作業工程をもとにWG部会で確認
	龍彫刻	金箔下地は、蒔地とする。	木彫部に通常用いられる技法のため
		龍彫刻は、額縁躯体に取り付ける前に裏面を加飾し、額縁躯体に取り付けた後に表面を加飾する。	尚家文書360記載の作業工程をもとにWG部会で確認
	題字	金箔下地は、蒔地とする。	木彫部に通常用いられる技法のため
		地板に題字を貼付後、加飾を行う。	尚家文書360記載の作業工程をもとにWG部会で確認
	落款印	落款印の印影部は金薄磨（金磨）、印影部以外の余白を朱塗りとする。	尚家文書で朱塗りとの記載 琉球事例・台湾事例等の傾向より（落款印の印影部の加飾は、題字と同じ手法）
		地板に落款印を貼付後、髹漆・加飾を行う。	尚家文書360記載の作業工程をもとにWG部会で確認
	作者銘・年号	題字と同じく、金薄磨（金磨）とする。	琉球事例・台湾事例等の傾向より（作者銘・年号の髹漆・加飾は、題字と同じ手法）
		地板に作者銘・年号を施した後、加飾を行う。	尚家文書360記載の作業工程をもとにWG部会で確認

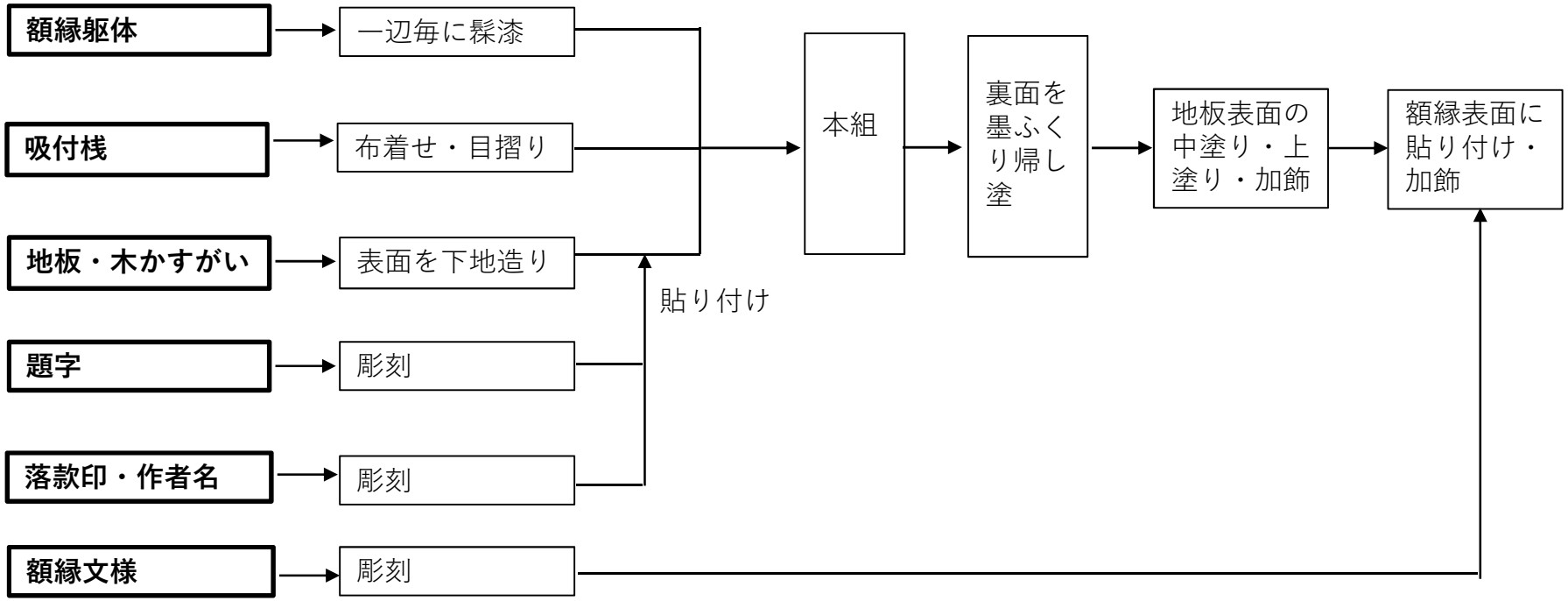
（２）技術者への聞き取りの概要

今回検討している木地構造（資料３ p16、地板のホゾと吸付桟のホゾを、額縁躯体の溝に嵌めこむ）を前提とした、作業工程に関する主な指摘は以下のとおりである。

・地板・吸付桟・額縁躯体を組み立ててから髹漆を始めると、木固め・下地造りの段階で木地が漆を吸い込んで木地同士がくっついてしまう。
・地板や吸付桟のホゾを、額縁躯体の溝に嵌めこむためには、それぞれ個別で髹漆を進めた後に、地板と額縁躯体を組み立てるとよいのではないか（ただし額縁躯体の四隅を一体化する布着せは無し）。

（３）製作手順（暫定案）

製作手順については、引き続き委員・監修者・技術者への意見を収集し、決定する。



※ここでいう髹漆は、下地造り（布着せ含む）、中塗り、上塗りまでを指す。

4-4. 手板（案）

資料４

令和５年度の原寸試作での髹漆・加飾作業の前に、今年度行う色味確認のための手板（案）を以下に示す。

	試作	色見本	試作数
黄色塗	レーキ顔料：漆＝３：７ (顔料は山吹や黄色またはその調合)	ア：石黄粉末：漆＝３：７または５：５（作成済み） イ：実物事例「康熙帝勅諭の外筒」の色味	３枚 (色見本の数分)
青塗	レーキ顔料：漆＝３：７ (顔料は青や緑またはその調合)	石黄粉末と漆：藍粉と漆＝？：？ ※中国扁額事例の青塗の縁取りを参考とするか	３枚 (色見本で調合比３種ほど検討)
朱塗	水銀朱赤口朱（日華）、 水銀朱本朱（日華）	－	２枚
黒塗	黒呂色（中塗用）、 上黒（上塗用）	－	２枚
墨ふくり帰塗	松煙＋木地呂（下～中塗用）、 松煙＋朱合漆（上塗用）	－	２枚
金薄磨（金磨）	３号箔に透漆を重ね塗り 下地：黄色漆に蒔地	－	１枚５工程または個別５枚 (塗重ねを０～４回)

4-4. 手板（案）

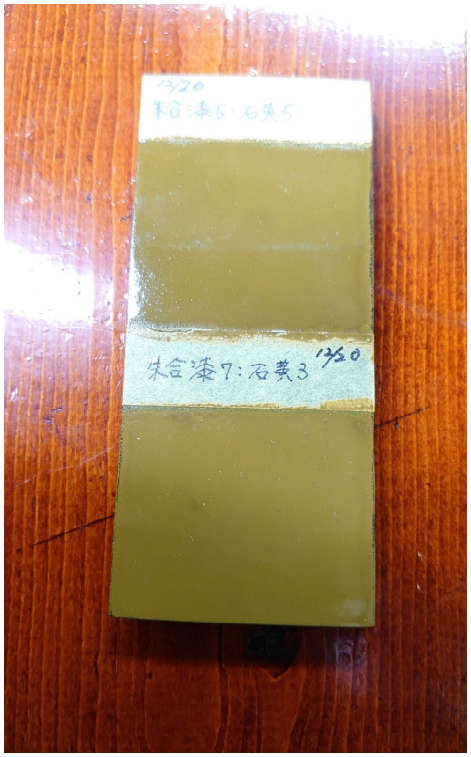
資料４

（１）黄色塗

・髹漆箇所：地板の正面

・実施方法：黄色塗は、令和３年度に、石黄の粉末と漆を混ぜた色見本を作成したが、発色が適切か不明。一方、黄色の塗りの参考事例として「康熙帝賜琉球国王尚貞勅諭写の外筒」（宮内庁書陵部蔵）があり、これを色見本の別案として検討することとする。

・扁額製作：黄色塗と文字付けの工程手順を、確認しておく必要がある。地板に文字を貼り付ける場合、先に地板全面の黄色塗を終わらせておく必要があると考えられる（地板に文字を彫る場合はその限りではない）。



石黄に漆を混ぜた色見本

(作成2021.12.20、撮影2022.8.31)

黄色塗（黄）の手板試作

(作成2022.1.25、撮影2022.8.31)

黄色塗（山吹）の手板試作

(作成2022.1.25、撮影2022.8.31)

資料４

（２）朱塗・青塗・黒塗

・髹漆箇所：地板の縁

・実施方法：青塗は、石黄の粉末と藍粉と漆を混ぜた色味を見本とし、現在使用可能な色材（レーキ顔料等）で同じまたは近い色を作成する。

朱塗は、水銀朱の赤口朱による。黒漆は、松煙を漆を混ぜる。

・扁額製作：朱塗・青塗・黒塗の工程手順について、地板を額縁に取り付ける前に行うのか、取り付けた後に行うのか、確認しておく必要がある。

朱塗・青塗その他の手板試作(作成2021.12.20、撮影2022.9.2)

資料４

（３）墨ふくり帰し塗

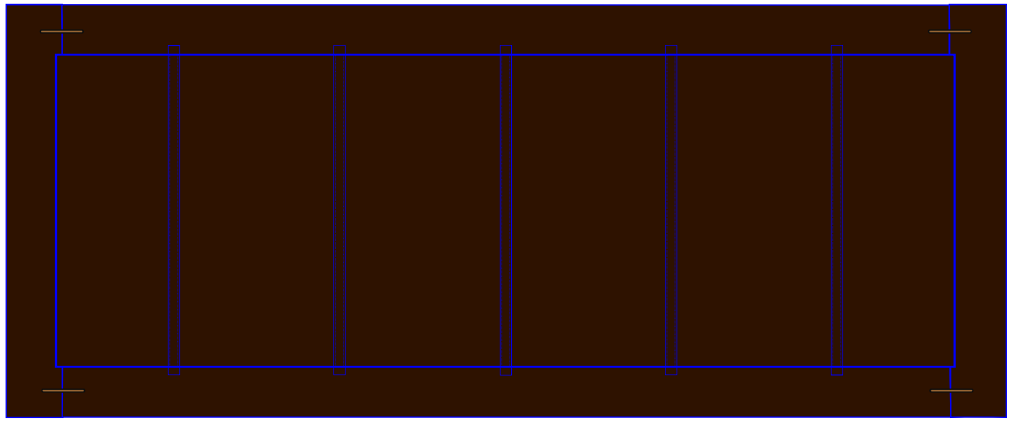
・髹漆箇所：扁額裏面

・実施方法：木地に墨を塗り、その上から透漆を塗る。

案ア：01.松煙墨（木地に含浸）　→　木地固め　→　空研ぎ　→　朱合漆。

案イ：01.木地固め　→　02.空研ぎ　→　03.松煙墨＋漆（黒漆）。

・扁額製作：墨ふくり帰し塗の工程の前に、布着せを行うことでよいか、確認しておく必要がある。



扁額裏側：墨ふくり帰し塗イメージ

松煙墨

資料４

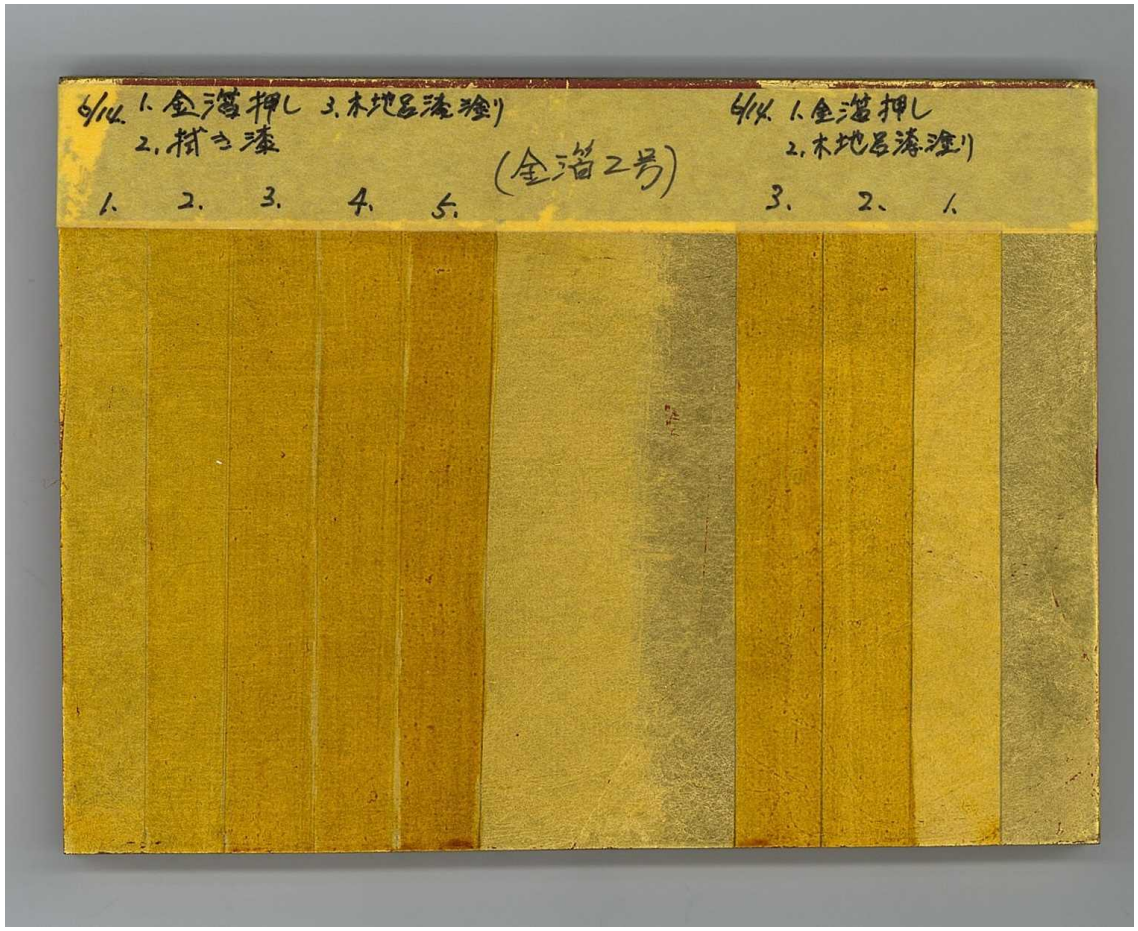
（４）金薄磨（金磨）

・加飾箇所：文字、額縁彫刻

・実施方法：金箔（3号）を貼った後に、透漆を塗る。

※立体形状の手板が入手できればそれで試作を検討

・扁額製作：黄色塗が完了した地板に、文字付けおよび金薄磨（金磨）を行う場合、黄色塗を汚さないよう注意しながら作業する必要がある。
額縁彫刻が透し彫りの場合、彫刻の完了後、地板に取り付ける前に、彫り裏面の金薄磨（金磨）を終わらせておく必要がある。



金薄磨（金磨）の製作事例

引用：「琉球王国文化遺産集積・再興事業」（沖縄県立博物館・美術館）の手板見本